

報告年月日 2013年8月20日

「八戸・十和田・六ヶ所村野外調査実習(防潮堤調査班)」

報告者 小林龍一(工学研究科M2)

1. カテゴリー:学生自主活動

2. 活動日時、場所

8月10日:八戸港防波堤に関する聞き取り調査と見学

8月11日:十和田八幡平国立公園周辺調査と調査内容を利用したワークショップ

3. 企画者:小林龍一(工学研究科M2)

4. 参加者:小林龍一(工学研究科M2)、田澤賢(理学研究科M1)、古川琢磨(工学研究科M2)

引率者:黒田剛(理学研究科助教)、久利美和(災害科学国際研究所講師)

5. 活動目的

(1)八戸港においては今回の東日本大震災において防波堤が大きく破損したことと実際の大規模震災において浮き彫りになった問題から、大規模な修理を要するとともに防災、そして地域との関わり方の在り方について再考を迫られていたと考えられる。今回は防波堤の工学的側面や文化的側面、これからの取り組みについて聞き取り調査を行うとともに、見学によって実際の景観の様子などを知ることで防災と地域との関わり方について理解を深めることを目的とする。

(2)集団におけるアイデア出しや難しい課題についての議論を円滑に効率よく行うためには互いに遠慮しないで物を言い合える雰囲気を作り上げる「場づくり」が非常に重要となる。そのため今回は課題を設定し巡視を行うことでこの場が特別であるという雰囲気を創り上げるとともに、ワークショップでは自分たちの願望・希望や自分にとってのこれからの課題について、ブレインライティングと親和図法を用いて議論することを目的とする。

6. 活動概要・報告事項など

(1)聞き取り調査によって防波堤の耐用年数や整備・点検方法などの工学的側面、企画・設計・建設時の外部機関との関わりといった経済的・文化的側面、そしてこれから計画・予定している取り組みについて理解を深めた。また様々な地点からの防波堤を観測することによって景観への影響や生活への影響を学んだ。そして周辺地域にとって身近な存在である防波堤について、どうあるべきかといった意見を述べ合った。

(2)今回、普段行かない比較的遠い場所に、普段あまり一緒に作業をすることのない人と一緒に行くこと。さら

に課題を設定し様々な場所を巡ることで、ある種の興奮状態を創り出し、それによってワークショップに臨むための「この場が特別である」という意識を浸透させた。ワークショップではリーディング大学院での自分達のことからの振る舞いについて考えることを議題に、自分達の希望や願望、学ぶべきことを列挙し整理することで自分たちの考えを可視化したそしてそれをもとに自分たちは何をすべきか議論を行った。

7. 特記事項・添付資料など

今回のワークショップは初めての取り組みであり、大いに成功したと言える内容ではなかったが、非常にたくさんのが得られたとともに、ワークショップ有意義さが体感できるものであった。下図1に今回ワークショップで得られた内容の一部を示す。同図のように非常に多様な意見が20分程といった極めて短い時間に挙げられた。またこのように意見を可視化することによって整理を容易にし、円滑な議論を可能とした。これらは私たちが他人を理解し、そして自分を深く理解するために非常に有意義であることが確認されたため、リーディング大学院において、これからもこういったワークショップを機会を見つけてより活発に行っていこうと考えている。

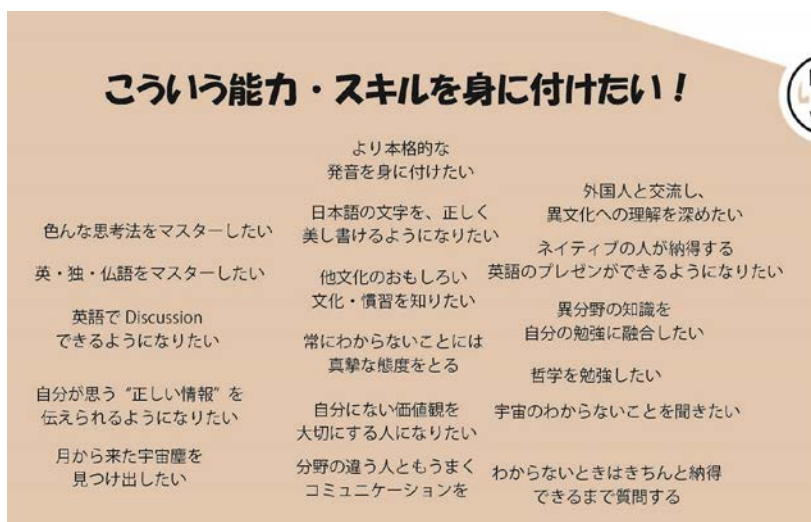


図1 今回の結果の一部(5分の1程度)